

競泳におけるわざ言語の有効性について

The effectiveness of craft language used in sport swimming

1K10C046-0 伊藤 慶太

主査 寒川恒夫先生

副査 奥野景介先生

【研究の目的】

スポーツ領域において卓越した技能を持つ人々をトップアスリートと呼び、彼らは独自の競技に対する感覚を持っている。競技力向上を目指す中で、選手・指導者間のやり取りにおいて感覚で表現する、または表現せざる負えない状況が多くある。この感覚は本人しか感じえないものである。これを『わざ言語』と呼ぶ。一方で、近年はスポーツ科学の発展により、主に科学的分析から競技力向上を目指す方法が主流となっている。そこで、『わざ言語』は競技力向上において有効な手段であるのかという疑問が生まれた。本研究ではまず『わざ言語』とは何かを先行研究を概説する。次に、スポーツの競技力向上において『わざ言語』は有効であるかについて論じていくのだが、より具体的な研究にするために競泳競技を研究対象に選定する。競泳の泳法の歴史の変遷を参考に競技特性を考察する。競技特性を考察した後に、競泳選手や指導者へのインタビューや参考文献を基に競技に対してどのように感覚を表現しているか、すなわち『わざ言語』を一つの文化として調査し、競技力向上において『わざ言語』は有効的であるのかを考察することを研究の最終目的とする。

【わざ言語と競泳の歴史の変遷と科学的見解の概説】

2章ではわざ言語の意義について先行研究ではいかなる議論が行われてきたかを生田久美子と倉島哲の議論を中心に概説した。二人の議論はわざ言語の研究は今後、定義づけを行うことではなく、「学び」に関連付けて行くことであるとした。最終的に生田が論じた Task と Achievement の2点として捉え、3つの役割を持つという広義のわざ言語を本研究での「わざ言語」と定義づけた。

3章では競泳の泳法がどのように生まれ、現在はどうのように科学的分析がなされているのかを「泳ぎの科学」(2008)を参考に概説した。

【競泳選手へのインタビュー】

4章では競泳選手へのインタビューをした。各種目一名ずつ、国内トップレベルの選手にインタビューをし、競泳選手のわざ感覚やわざ習得方法に

ついて調査した。

【結論】

結論から述べると競泳の競技力向上において全面的にわざ言語が有効的であるとは言い切れないが、1つのメソッドとして活用することによる有効性を認めることができると考える。わざ言語の有効性を全面的に認めることはできない要因として、指導者と学習者の感覚のズレである。競泳の世界で言い換えるならば、コーチと選手間の感覚のズレである。一方で、上述のクロール泳を専門とする選手Aの「バランスボールを手、脇、腹を使って抱え込むようにかけ」という感覚を共有でき、競技力を向上させたという成功例もあり、一概に競泳においてわざ言語は有効ではないとは言い切れないと考える。また、選手から発信するわざ感覚によってコーチがあらゆる判断材料を使い、修正点を見出していることが選手、コーチ両者からのインタビューにより明らかになった。よって、競泳におけるわざ言語の有効性は認めることはできると結論付けた。

【今後の展望】

競泳においてわざ言語を有効的に活用するためには何をすべきかを論じたい。この課題において重要なのは、選手へのスキル技術の知識の提供を指導者が徹底することにあると考える。選手のインタビューでスキルを科学的に指導されたいという話が多かったことから推測すると、知識があればスキル要素の指導はいらないとも解釈することができる。感覚は誰にでもある。この感覚を自らの科学的知識にのせて自らの競技活動やもしくはわざの伝承において活かればより競泳界は発展していくと展望できる。本研究ではわざ言語の定義付けから始まり、競泳についての知識を概説してから本題に入り、競泳におけるわざ言語の有効性を認めることができると論じた。今後の課題としては、いかにわざ言語を競泳において活用させるかについて研究されることである。